価値の再発見❻

災害文化の共創にむけて

―海は与え、海は奪うとしても

川村清志（国立歴史民俗博物館）

キーワード　災害文化、災害、減災、共創、レジリエンス

現代における災害文化の共創、について考えてみたい。災害文化とは災害をなくすための文化ではない。誰もが薄々気づいていることだが、災害を完全に防ぐことは不可能である。災害文化とは、いつやってくるのかわからないが、いつかは必ずやってくる災害と折り合いをつけ、過去の教訓をもとにその備えを怠らず、日々の生活をよりよく生きるための術を見いだすことに他ならない。

２０１１年の東日本大震災の後、政治家や研究者、マスメディアによって「想定外」という言葉が使われた。地震の規模、津波の到達時間、浸水域、全てが想定外であった、と。それらを教訓として政府や自治体は、「強靱化」という言葉を呪文のように繰り返し、大規模な地域の改変を推し進めた。その象徴的な存在が、三陸の海岸部に敷設され、海と人を隔絶した防潮堤である。東日本大震災当時の津波の遡上高に合わせて、それらの防潮堤は築かれた。国民の生命と財産を守る、という大義名分のもとに、海とともに暮らす地元の人たちの不安や懸念の声はかき消されていった。

しかし、２０２４年の能登半島地震では、何が起きただろうか。確かに奥能登の一部では、津波の被害を被った地域もある。しかし、日本海に面する半島の外浦では、津波よりも海岸部の想像を絶する隆起が顕著だった。多くの港が干上がり、使用できなくなった。震災後も、海での生業の再開の目処は立っていない。隆起の被害は人々の日常生活を根底から覆してしまった。言うまでもないが、海の隆起に防潮堤は何の意味もなさない。特定の災害に対して「強靭化」を試みても、災害は異なった形で生活を脅かす。

では私たちは、災害への備えを諦めて、やがてくる災害を甘んじて受けるしかないのだろうか。もちろん、そんなことはない。人は必ずいつか死ぬ、という事実を前にして、生きることを諦める人間がいないのと同じである。むしろ人はいつか死ぬからこそ、生きている現在の意味を問いかけ、自らが望む生活を希求している。同じように災害を否定したり、距離を置くのではなく、災害と向かい合い、折り合いをつけ、その危険性を軽減する術を日々の生活のなかで育んでいかねばならない。

そもそも強靭化と訳されたレジリエンスは、弾性や柔軟性、しなやかさという意味で使われている。私たちはレジリエンスの本来の意味に立ち返るべきかもしれない。災害からは逃れられないが、それらを柔軟に受け止め、被害を軽減するための知識と技術を共有していく必要がある。例えば、災害を記憶する術は、先人たちの営みから見出すことができる。津波の浸水域に記念碑を設けて子孫に警鐘を残したり、記念碑に刻まれた文面を残すための年中行事の事例などが、日本各地から報告されている。

災害で失われた命に対して、地域の人々は各々の生活のなかで体得した鎮魂の作法を身につけていた。東北地方に残る昭和の大津波の記念碑は、当時のマスメディアの援助で作られ、教訓と警告が前面に記されていた。しかし、それ以前の記念碑には、失われた命を記憶し、彼らの死を共同体として受け止め、後世に伝えようとする思いが刻まれている。このような鎮魂の作法は、阪神淡路大震災やそれ以後の災害の後に作られたモニュメントにも受け継がれている。

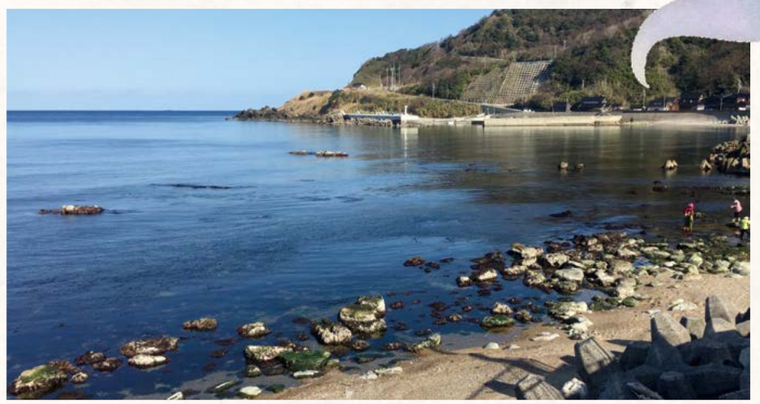
また、伝統的な社会では死者の供養や鎮魂に際して、民間の宗教的職能者が大きな役割を果たしていた。彼らは死者を代弁し、残された者の心の傷に触れあう言葉を語り続けた。各地に残る民俗芸能も大きな役割を果たしている。東北の鹿踊りやじゃんがらのような盆に営まれる芸能は、もともと亡くなった人々の冥福を祈る芸能であった。これらの芸能は、災害で亡くなった多くの人々を弔い、残された人々の心を慰撫してきた。

さらにいえば、日本の祭礼の起源には人々の災害に対するリアクションという側面が見られる。日本を代表する都市祭礼、京都の祇園祭は、約１０００年前に起きた貞観地震や富士山噴火といった国を揺るがす天変地異を鎮め、京内の穢れをはらうために始まった。あるいは東北の秋田県に伝わる鹿嶋祭りも、天明の大飢饉などの社会的な危機を契機としていたとされる。

このようにみていくと災害文化とは、災害に対する備えや減災を目的とした活動に限定されるものではないことがわかる。突発的で理不尽な災害を少しずつ馴らし、日々の生活のなかに組み込んでいく営みの総体にほかならない。確かにそのような営みは、災害に対して受動的な面が大きいという指摘もあり得る。今日の技術や科学的知見をもってすれば、もっと災害を軽減し、多くの人たちの心身をケアすることも可能だろう。大事な点は、これまで培ってきた多くの文化を再認識し、現代的な知見と組み合わせつつ、緩やかな広がりの中で災害に対する文化を創造していかなければならないという点である。私たちは近代以降の科学的知見に寄りかかった生活スタイルを今一度、見つめ直さなければならない。副題にも記したように海は多くのものを奪っていった。その裏面で実に多くのものも与えてきた。とりわけ海とともに暮らしてきた人々にとっては、海は日々の糧を得る以上の存在であった。

先年の地震に見舞われた奥能登地方は、私の主要なフィールドである。30年通い続けた輪島市の皆月は、日本海を臨む小さな浦に位置する。かつてはイワシの刺し網漁を中心に多くの人々が、海での生業に従事していた。皆月の夏祭りも、海と切り離すことはできない。祭りの中心となる曳山も舟の形を模しており、波が打ち寄せる砂浜を引いた。しかし、今日、海上安全や大漁祈願といった題目とは裏腹に、海を生活の場にしている人はほとんどいない。人々の生活を支えるには、この浦は小さすぎた。しかし、生活を支えることはできなくとも、その浦は人々の想いや記憶を支えてきた。都会に出た者たちも祭りの日には戻ってきた。イワシ場で賑わった浜が海岸道路に変わっても、曳山は浜風をうけて、アスファルトのうえを進んでいく。海を与え、さらに与え続けたのである。

しかし、すでに述べたように、皆月の海は３ｍ以上、隆起し、地元の港も完全に干上がった（図１、２）。人気のない多くの家屋は、解体の日を静かに待つだけである。この圧倒的な災害の傷痕に対して、即効性のある処方箋を見出すことは困難である。過疎化の進む個別の集落や地域だけでは、この規模の災害を乗り切ることは不可能だろう。そこで育まれてきた文化を広範な社会集団やネットワークにつなげていき、海とともに暮らす意味や海から与えられたものの意味を振り返る、そんな地道な活動が必要とされている。まずは、地域で生きる人々の声を聞き、埋もれかけた文化を呼び起こすことからしか、新たな時代の災害文化を共に創り出す機運は、高まっていかないだろう。



上／図1　地震前の皆月海岸の様子
下／図2　地震後の皆月海岸の様子